



Title	話者の前提と陳述副詞 : 従属節に生起する副詞を例に
Author(s)	西, 真理子; Nishi, Mariko
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 9, 39-52
Issue Date	2005-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45654
Type	departmental bulletin paper
File Information	BISC009_003.pdf



話者の前提と陳述副詞

－従属節に生起する副詞を例に－

西 真理子

要 旨

本稿では、陳述副詞のうちで従属節に生起し複文構造を展開するという特徴をもつものについて考察する。拙論(2005)では「せっかく」が導く従属節Pと主節Qとの接続関係を考察した結果、「せっかく」が持つ「話者の価値判断に対する前提」が主節Qの意味内容に制限を加えていると主張した。

「せっかく」の特徴は次の三点である。①話者の価値判断に対する前提を持つ。②従属節に生起し複文構造を展開する。③主節の内容を制限する。

日本語の陳述副詞には、「せっかく」以外にもこの3条件を満たす一群が存在する。本稿では「あまり+肯定形」「いくら」「どんなに」「もし」を扱い、それぞれの副詞がもつ「話者の前提」について考察を行った。

話者の前提をもつ陳述副詞は外国語に翻訳しにくく、その点で日本語学習者にとっては習得困難なものの一つとなっている。本稿では、このように意味論では記述しきれない部分を補う一助として、構文論的視点から考察を行った。日本語学習者に陳述副詞のもつ話者の前提を理解しやすくすることはより効果的な日本語学習につながるのではないかと思われる。

〔キーワード〕 陳述副詞、話者の前提、複文

1. はじめに

蓮沼(1987:203)は「日本語の副詞の中には、外国語に翻訳しようとしても対応する表現がみつけないばかりでなく、日本語の類義表現による言い換えによっても、そのニュアンスを正確に表しえないような、複雑な用法をもつ一群が存在する」と指摘した。その例として「せっかく、どうせ、さすがに、やはり」等を挙げている。日本語学習者にとって、こう

いった類の副詞の用法は理解しにくく、習得しにくい項目である。

これらの副詞の用法が難しいと言われる理由として、蓮沼は「話し手がつもつ何らかの心理的『前提』との関係に基づく話し手の心的態度を表すという点」にあると述べている。「前提」とは、話し手個人の予想、期待、知識をはじめとし、特定の文脈の中で話し手、聞き手が共有する知識や、さらには世間一般の通念、常識といったものまで含む、きわめて広い概念であるという。さらに、この「前提」は「日本人ならごく当たり前な心理的前提」として暗黙のうちに了解されるような場合が多い。それゆえ、このような前提を共有していない外国人学習者にはこれらの副詞の意味・用法を容易に捉えることができないのである。

拙論(2005)では、「せっかく」を取り上げ、そこに込められた話者の「前提」を解明するために「せっかく」の構文的特徴に着目した。この構文的特徴とは、「せっかく」が必ず従属節に生起し、複文構造を展開するというものである。拙論では「せっかく」によって導かれた従属節と主節との関係を構文論的観点から考察した。そして、「せっかく」に込められた話者の「前提」が、従属節内で完結されずに、主節にまで及んでいると結論づけた。

本稿では、「せっかく」以外の陳述副詞についても考察を行う。陳述副詞の中には、「せっかく」と同様に、必ず従属節に生起し複文構造を展開するという構文的特徴をもつものがいくつか見られる。例えば、「あまり＋肯定形」「いくら」「どんなに」「もし」である。

本稿における議論は、これらの陳述副詞に関しても「せっかく」と同様、複文構造の展開に話者の「前提」が関わっているのではないかという点である。その考察から以下の仮説を提示する。

- (1) 複文構造を展開する陳述副詞には、話者の「前提」が存在している。

拙論(2005)では「せっかく」がつもつ話者の「前提」が、複文構造を展開させていると述べた。本稿では、この関わりが同一の構文的特徴をもつ他の陳述副詞にも妥当するかどうかを検証する。

次章では、せっかく文の論理構造に働きかける話者の「前提」を先行研究で紹介する。3章では「せっかく」と同一の構文的特徴をもつ「せっかく類の副詞」の考察を行う。3.1.1節では「あまり」3.1.2節では「いくら」

「どんなに」3.2節では「もし」を取り上げる。

2. 先行研究

渡辺（1980）は「せっかく」には、単文では用いられにくいという独特な用法上の制約があることを指摘している。例えば「せっかく」を単文に用いた下の(2)が容認しがたいのに対し、複文に用いた(3)が自然な日本語である点に、それが示されている。渡辺（1980）と渡辺（2001）では内容上の変更はないが、ここでは渡辺（2001）から例文を引用する。

- (2) a. *¹せっかくパリまで来ました。
b. *せっかく雨がやんだ。
- (3) a. せっかくパリまで来たのに、ルーヴルを見ずに帰るなんて残念だ。
b. せっかく雨がやんだのだから、今からでも出かけようよ。

（渡辺2001：31）

(2)a. bが非文になることからわかるように「せっかく」は主節に生起しないという構文的特徴がある。「せっかく」は通常(3)a. bのように従属節に生起し、ある意味の特徴を持った主節を求める。そのため文は必ず複文構造となる。さらに渡辺（1980）は「せっかく」によって導かれた従属節Pと主節Qの意味的関係を「順接関係」と「逆接関係」とに大別できると指摘した。(3)aのように「のに」等の接続表現で接続されたものを「逆接関係」、また「のだから」等で接続された(3)bを「順接関係」としている。

そこで、なぜ「せっかく」は主節だけで完結せずに複文構造を要求するのかという疑問が生じる。拙論（2005）では、名嶋（2003）の「3段階の論理構造」、蓮沼（1987）の「価値顕現義務の原則」の説を援用し、「順接関係」「逆接関係」について、それぞれの実例から「せっかく文」の論理構造の考察を試みた。

2.1 順接関係

順接関係の場合、「せっかく」と最も高い共起関係をもつ接続表現は「のだから」である²。そこでせっかく文の論理構造を分析する前に、「のだから

ら」の機能を見てみたい。

- (4) ノダカラは「Pである。よってRと判断する。ゆえにQと発話する。」
(名嶋2003：20)

名嶋 (2003) は、「のだから」は「P：根拠—Q：判断—R：その判断に基づく発話行為」という3段階の論理構造を有すると指摘した。この構造をせっかく文で考えてみたい。

- (5) セっかく母が料理を作ったのだからみんなで食べよう。 (作例)
(6)

せっかく母が料理を 作った	だから食べなければ ならない	みんなで食べよう
P根拠	R判断	Q判断に基づく発話行為

「のだから」には本来従属節と主節との間に存在すべき判断 (R) が言語化されておらず、一段階論理が飛躍しているのだと名嶋 (2003) はいう。(6)は(5)の文を3段階の論理構造で示したものである。Rの「食べなければならぬ」という判断は言語化されない、言い換えれば「表出されない」部分であり、これが話者の前提となる。

さて、「せっかく」が話者の前提の決定づけにどのように影響しているのかを見てみたい。そこで、(6)の「せっかく母が料理を作った」というPに対し、R「その料理を食べなければならぬ」という判断がどのように下されるのかを考えてみたい。

- (7) 母が料理を作ったから、食べません。 (作例)
(8) *せっかく母が料理を作ったから、食べません。

日本語母語話者であれば(8)は非文であるということは直感的に判断できる。この文が非文になるのは次に示す「価値顕現義務の原則」に違反しているためであると考えられる。蓮沼 (1987) は価値評価の大前提である、「価値顕現義務の原則」を次のように規定した。

(9) 価値顕現義務の原則

潜在価値は顕現させなければならない。(蓮沼1987:207)

蓮沼によると、我々はある事態で潜在的なプラスの価値に接したとき、「価値顕現義務の原則」に基づいて言語化を行う。そして、その事態の利用価値を最大限に実現させなければならないという自らに義務を課すような判断を行うのだという。これは「せっかく」の振る舞いをそのまま説明するものである。従って、話者がある事態の持つ価値を認めるなら、主節にはその価値の実現を願望する話者の態度が現れる。(8)が非文となるのは、「せっかく」によって話者が評価したプラスの価値が主節に反映されておらず、「価値顕現義務の原則」に違反しているからである。従って(8)の場合、Qは「ぜひ食べよう」といった内容でなければならない。この原則によって、「せっかく」は従属節に生起しながらも、主節の内容を制限するはたらきがあると解釈できる。そこで、以下、実例でその論理構造を確認したい。

(10) せっかく苦勞して忍び込んだのだから、捜すだけ捜してみよう。

(赤川次郎『女社長に乾杯』)

(11)

せっかく苦勞して 忍び込んだ	だから目的のものを捜さ なければならない	捜すだけ捜してみよう
P根拠	R判断	Q判断に基づく発話行為

(10)の論理構造は(11)の構造図のようにP-R-Qで示すことができる。話者はP「苦勞して忍び込んだこと」に価値を置いているが、ここでその価値が完結しているわけではない。それは「せっかく苦勞して忍び込んだ」という文が成り立たないことからわかる。話者はP「苦勞して忍び込んだ」-R「だから目的のものを捜さなければならない」と判断する。そしてこの判断を「価値のあることである」と表出されていないRで認める。更に、それを前提とした上でQ「捜すだけ捜してみよう」という発話行為が導き出されるのである。

2.2 逆接関係

次に逆接関係の例を見てみたい。拙論(2005)では逆接関係のせっかく文の構造を(12)と仮定し、従属節と主節の間に非言語化された話者の前提を確認した。

(12) Pである。よってRと判断する。しかしQである。(西2005:26)

PにはRに表される話者のプラスの評価を形成する根拠が入る。そしてRにはPの内容を受け、そのプラスの価値を実現させようという判断が入る。このRは表出されない部分であるが、話者が表現する結果Qの前提となる。

(13) せっかく母が料理を作ったのに、誰も食べなかった。(作例)

(14)

せっかく母が料理を 作った	だから食べなければ ならない	しかし誰も食べなかった
P根拠	R判断	Q結果

(13)を3段階の論理で示したものが(14)である。P「母が料理を作った」－R「だからそれを食べることによってその価値の実効性が実現するのだ」と話者は判断する。これが「価値顕現義務の原則」を含んだ話者の前提となる。しかし、Qではその期待に沿った結果を得ることができず、話者の惜しみ、嘆く態度が表されるという構造になる。これをさらなる事例で確認したい。

(15) せっかく持ってきてもらったのに、枕元の詩集をひらく気力が湧いてこなかった。(立原正秋『冬のたび』)

(16)

せっかく(詩集を) 持ってきてもらった	だからその詩集を手に とって読むべきである	しかし枕元の詩集を ひらく気力が 湧いてこなかった
P根拠	R判断	Q結果

まずP「せっかく(詩集を)持ってきてもらった」ことに対して－R「そ

の詩集を手にとって読むべきである」という話者の判断が生じる。これは R を成し遂げてこそ、「せっかく」に込められたプラスの価値が実効性を持つという前提である。しかし Q 「枕元の詩集をひらく気力が湧いてこなかった」となっている。ここに話者の前提 R を裏切ったことに対し、申し訳ないという気持ちが表われている。

これまで見てきたように、陳述副詞「せっかく」には、従属節 P と主節 Q の接続関係が発話の順接・逆接にかかわらず、共通して「R」という「話者の価値尺度に基づく判断」が前提として存在している。この「R」が P と Q を堅く連結させているために(2) a. b のような単文が成立しないのである。

3. 考察

3.1 せっかく類の陳述副詞

前節では「せっかく」が展開する複文の論理構造について紹介した。日本語の陳述副詞には「せっかく」以外にも、主節に生起せず従属節に生起し、複文構造を展開するといった特徴をもつ副詞がある。例えば譲歩の意味をもつ「いくら」「どんなに」「あまり」また、仮定・条件節を導く「もし」「たとえ」などである。本節では、これらの副詞の論理構造についても考察を加えていきたい。

3.1.1 あまり

「あまり」は否定形と呼応する形式(17)と、肯定形と呼応する形式(18)の二つの用法がある。否定形と呼応した場合、従属節にも主節にも生起することができ、単文で完結することができる。一方、「あまり+肯定形」の場合は単文ではおさまらず、従属節に生起し複文構造を展開する。(20)が非文になるという点で「せっかく」と共通の論理構造を有する。

(17) あまり感心できない。(森田1998:74)

(18) あんまり³おいしかったので、つい食べ過ぎた。(森田1998:74)

(19) ?あんまりおいしかったので、食べませんか。

(20) *あんまりおいしかった。

(21)

(その料理は) あんまり おいしい	とても気に入った	だから食べ過ぎた。
P 根拠	R 判断	Q 結果

「あまり+肯定形」と共起しやすい接続表現として「から、ので」等が挙げられる。グループ・ジャマシイ (1998) によると「あまり+肯定形」は、話者の予想を上回る事態に直面し、その程度が高すぎることを意味する。そしてそこから必然的に起こる事柄や、導き出される判断・結果などが主節に現れる。ゆえに(19)のように主節中の勧誘など働きかけのモダリティとは共起しにくい。そして、「せっかく」と同様に「あまり」の統語的作用域が主節にまで及んでいることがわかる。

次に、なぜ単文(20)が非文になるのかを考えてみたい。「あまり」の特性を見るために「程度の高さ」を表す副詞「とても」と比較する。

仁田 (2002) の分類によると「とても」は程度副詞に含まれる。程度副詞とは「属性 (質) や状態を表す成分に係ってその程度性を修飾・限定する (仁田 2002: 145)」ものであり、命題内容に関与するものである。従って「とてもおいしかった」の場合、「とても」は「おいしかった」を直接修飾しており、単文でも完結できる。しかし、(19)(20)からもわかるように、「あまり」によって表される話者の主観は従属節を超え、主節にまで及んでいる。「あまり」は確かに「おいしかった」の程度を示しているが、それだけでなく話者の前提あるいは想定を上回る程度の高さに対する驚きなどの心的姿勢も表している。(18)の論理構造は(21)の構造図で示することができる。従属節の根拠Pに対し、表出されない話者の前提Rの判断が下される。この前提Rが主節Q「つい食べ過ぎた」を導くものと思われる。この点で「あまり+肯定形」の論理構造は、前章で紹介した「せっかく」のものと同通していると考えられる。

3.1.2 「いくら」「どんなに」

次に「いくら」「どんなに」についての考察を行う。これらの副詞もいままでも考察した陳述副詞同様、主節には生起しない。一方、接続表現「とても」と共起しやすく、複文構造を展開する。そのためこれらの副詞も「せっかく類の副詞」に含むこととする。

- ⑫2) いくら子供でも、それぐらいのことはわかる。 (中田1991:87)
 ⑫3) どんなに亀が急いでも、どうせ晩までかかるだろう。

(「ウサギとカメ」のウサギの台詞)

中田 (1991) によると⑫2は言外にある「子供だから、ものがよくわからない」という、自分の主張⁴とは相反する命題をいったんは表現する。しかし、それを考慮に入れた上でもなお、「それぐらいの (かんたん)な ことはわかる」と述べる形をとる。そして、それにより主張のインパクトを強めていると分析している。すなわち、ここには世間一般の通念、常識という話し手と聞き手に共有された「子供だから、ものがよくわからない」という前提が存在しているのである。更に、それがここで逆接の「でも」で接続されることにより、その前提をふまえていながらも「自分は逆の考えである」という話者の強い心的態度も表われている。

一方、⑫3では、ウサギは「亀は歩くのが遅い」という前提の上で、亀が極限の早さで歩んだとしても決して昼間に追いつかれることはないと判断する。従って、そこから「晩までかかるだろう」という予想が導かれる。ここで「どんなに」を用いることにより「昼間に追いつかれる可能性」が強く否定されている。さらに後件の断定的な気持ちを表す「どうせ」と共起することにより、ウサギの絶対的な余裕が読み取れる。以上の考察から、これらの譲歩を表す陳述副詞にも表出されない話者の前提が存在しているということになる。

3.2 もし

本節では、条件設定に関わる副詞について考えたい。代表的なものに「もし」、反現実的な「たとえ」などが挙げられる。これらの副詞も単文で用いられることはない。必ず「もし~なら」「もし~たら」「もし~ても」「たとえ~ても/でも」等の接続表現と共起し複文構文にのみ生起する。

森田 (1998)、グループ・ジャマシイ (1998) は「もし」を次のように記述している。

- ⑭4) もし(森田1998:1129) : ある仮定的な条件を設定し、その場合において生じるはずの事態を以下のことばで述べる。
 ⑭5) もし(グループ・ジャマシイ1998:583) : 後に条件表現を伴い、

ことさらに仮定的に設定する話し手の態度を表す副詞。

話者が「ある仮定的な条件を設定」という記述は理解にたやすいが、25の「話し手の態度を表す副詞」というのは具体的にどういうことなのだろうか。

(26) もし午後雨が降ったら、傘を持って迎えに来てください。

(森田1998：1129)

(27)

もし午後雨が降ったら	傘を持っていない 私は困るので	傘を持って迎えに 来てください
------------	--------------------	--------------------

P 根拠

R 判断

Q 判断に基づく発話行為

(28) ご飯を食べたら、私の部屋へ来てください。(市川2005：403)

(29) *もしご飯を食べたら、私の部屋へ来てください。

(30) もし今ご飯を食べたら、夕食は食べられなくなるよ。(作例)

(31)

もし今ご飯を食べたら	夕食の時間がもうじきな のでそれまで空腹になら ないから	夕食は食べられなく なるよ
------------	------------------------------------	------------------

P 根拠

R 判断

Q 判断に基づく発話行為

(26)の論理構造は、(27)の構造図のようにP-R-Qで示すことができる。P「午後に雨が降る」は話者によって設定された仮定的な条件である。この条件が実現された場合、話者はRで示したように「傘を持っていない私は困る」といった内容の判断をする。そして、この前提を踏まえた上で、Qの「傘を持って迎えに来てください」という聞き手に対する依頼の発話行為が導かれる。よって「もし」が導く複文の論理構造にも、話者の前提が関わっている。

ここで、「もし」が単に条件を示すだけでなく「話し手の態度を表す副詞」であることを(28)(29)(30)の用例から検証する。(28)に「もし」を付加させた場合、(29)のように非文となる。これはP「ご飯を食べる」という行為は日常的になされるものであり、話者によって設定されたものではないからで

ある。一方、(30)のP「ご飯を食べる」は日常的行為ではなく「今、この時間にご飯を食べた場合」であり、これは話者によって設定された仮定的条件である。よって、この文も(31)の構造図で示したように、話者の前提が主節に及んでいることがわかる。

本節の考察から「あまり+肯定形」「いくら」「どんなに」「もし」等の陳述副詞も「せっかく」と同一の構文的特徴をもち、話者の「前提」が存在していることが明らかとなった。これらの副詞を統一的に扱うことが、日本語学習者の理解を促進するのではないだろうか。

4. まとめ

日本語学習者の立場からすると陳述副詞は、ニュアンスと呼ばれるものが理解習得できないと、つまり表出されない部分の理解習得がないと、わかったことにならないという問題が従来から提起されていた。

本稿では、ニュアンスを扱う意味論で記述しきれなかった部分を補う一助として、構文論的観点からの記述を試みた。まず、同じ統語論的特徴を持つ副詞を一つのグループにまとめ、それぞれの副詞が共起しやすい接続表現型式に注目した。次に前件Pと後件Qの間にある話者の前提Rが形成される推論過程を示した。

今回考察した「あまり+肯定形」「いくら」「どんなに」「もし」を「せっかく類の副詞」と名付けることとする。「せっかく類の副詞」の特徴を以下にまとめる。

- 1) 話者の価値判断に基づく前提をもつ
- 2) 必ず従属節に生起し複文構造を展開する
- 3) 主節の内容（モダリティ）に制限を与える

こういった特徴を日本語学習者に提示することが、より効果的な理解につながるのではないだろうか。

今回は複文の従属節を導く陳述副詞のみの考察にとどまったが、今後は文を超えた談話のレベルにおける副詞にも視野を広げていきたい。

注：

- 1 *は非文法的であることを示す。
- 2 小矢野(1997)のデータによると順接関係では「せっかく～のだから」が112例中62例と圧倒的に多く、その他「～のだからと」「～ものだから」「～のなら」等が続く。逆接関係では「せっかく～のに」が160例中100例という高い共起関係を示し、それに続き「～ても」といった仮定的逆接を表すものがあつた。出典は「CD-ROM版新潮文庫の100冊」の翻訳作品を除く和文作品、及び朝日新聞「天声人語」「社説」1985年分。
- 3 「あんまり」は「あまり」の口頭語として使われる(森田1998:73)。
- 4 中田は「子供だから、ものがよくわからない(PならばQ)」という言外の要素を「自分の主張」と述べているが、湯本(2004:244)は、これは話し手が、話し手と聞き手が共有しているであろうと想定している知識であり、「百科辞典的知識」と呼んでいる。

参考文献：

1. 市川保子(2004)『初級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク
2. グループ・ジャマシイ(1998)『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
3. 小矢野哲夫(1997)「副詞『せっかく』の用法」『日本語・日本文化研究第7号』大阪外国語大学日本語講座
4. 武内道子(2005)「関連性への意味論的制約－「しょせん」と「どうせ」をめぐって－」『副詞的表現をめぐって－対象研究－』ひつじ書房
5. 中田智子(1991)「談話における副詞のはたらき」『日本語教育指導参考書19副詞の意味と用法』国立国語研究所
6. 名嶋義直(2003)「ノダカラの意味・機能－語用論的観点からの考察－」『語用論研究第5号』日本語用論学会
7. 西真理子(2005)『日本語の陳述副詞と節の接続－「せっかく」を中心に－』平成16年度北海道大学大学院国際広報メディア研究科修士論文
8. 西原鈴子(1991)「副詞の意味機能」『日本語教育指導参考書19副詞の意味と用法』国立国語研究所
9. 仁田義雄(2002)『新日本語文法選書3副詞的表現の諸相』くろしお出版

10. 蓮沼昭子（1987）「副詞の語法と社会通念－『せっかく』と『さすが』を例として－」『言語学の視界』大学書林
11. 森田良行（1998）『基礎日本語辞典』角川書店
12. 湯本久美子（2004）『日英語認知モダリティ論－連続性の視座－』くろしお出版
13. 渡辺 実（1980）「見越しの評価『せっかく』をめぐる－国語学から言語学へ－」『月刊言語第9巻第2号』
14. 渡辺 実（2001）『さすが！日本語』筑摩書房

例文出典：

1. 新潮文庫編集部（1995）『新潮文庫の100冊CD-ROM』新潮社

にし まりこ（留学生センター非常勤講師）

Presupposition of Japanese modal adverbs: The case of adverbs in subordinate clauses

NISHI, Mariko

The purpose of this paper is to clarify the characteristics of some Japanese modal adverbs, including *sekkaku*, *amari*, *ikura*, *donnani* and *moshi*. They have three syntactic common features as follows:

- 1) They include a speaker's presupposition.
- 2) They appear in the subordinate clause of a complex sentence.
- 3) They influence the modality of the main clause.

These modal adverbs are difficult for learners of the language to master. They are difficult to translate exactly, and their nuances cannot be captured by mere paraphrases.

This paper maintains that these modal adverbs should be taught as a group to Japanese learners, and that it is essential to consider them from a syntactic as well as from a semantic point of view.